

## アレクサンダー・ベルナーの救貧制度調査報告記（2）

## —— ニュルンベルク ——

渡邊 裕一

## 〔解題〕

以下で紹介するのは、帝国都市シュトラースブルク（ストラスブール）の喜捨管理補佐官（Diakon）であったアレクサンダー・ベルナーが1531年に行った救貧制度調査旅行の報告記である<sup>1</sup>。アウクスブルクを取り上げた前編<sup>2</sup>に引き続き、今回は南ドイツを代表する帝国都市ニュルンベルクの救貧のあり方についてベルナーが報告する箇所を翻訳・紹介する。

ニュルンベルクの住民数は、15世紀後半にはおよそ28,000人、16世紀半ばには40,000人に達し、神聖ローマ帝国きっての大都市であった。市参事会員を独占した門閥家系や大商人などの富裕層は人口の5パーセントほど、手工業親方は10パーセントほど、職人層は40パーセントほどであり、手工業が大きな存在感をもった都市であった<sup>3</sup>。残りの45パーセントほどは、使用人や日雇い労働者であり、ベルナーの調査対象となる貧困層や物乞い、浮浪者の数も少なくなかった<sup>4</sup>。

14世紀以降、ニュルンベルク市参事会は、それまで貧民救済の主体であった教会や修道院の管理人を任命し、自身の保護下に置くことで救貧事業にも参入し始める<sup>5</sup>。1370年には現存する

<sup>1</sup> Alexander Berners Erkundungen über das Armenwesen in Nürnberg, Augsburg, Ulm, Memmingen, Isny, Lindau, St. Gallen, Konstanz, Zürich, Basel, in der Markgrafschaft Baden, in Württemberg, in Schwäbisch-Gmünd, Dinkelsbühl und Onolsbach (Ansbach) [1531], in: Otto Winkelmann, Das Fürsorgewesen der Stadt Straßburg vor und nach der Reformation bis zum Ausgang des sechzehnten Jahrhunderts, Leipzig 1922, Nr. 204, S. 266-283. ロルフ・ミュラーによる現代ドイツ語訳も参照、Übersetzung von Rolf Müller, in: Christoph Sachße/Florian Tennstedt (Hg.), Jahrbuch der Sozialarbeit 4, Hamburg 1981, S. 69-88; ベルナーの救貧調査旅行については、以下も参照。Wolfgang Hartung, Armut und Fürsorge: eine Herausforderung der Stadtgesellschaft im Übergang vom Spätmittelalter zur Frühen Neuzeit, in: J. Jahn et al (Hg.), Oberdeutsche Städte im Vergleich. Mittelalter und Frühe Neuzeit, Sigmaringendorf 1989, S. 158-181.

<sup>2</sup> 渡邊裕一「〔史料翻訳〕アレクサンダー・ベルナーの救貧制度調査報告記（1）—アウクスブルク—」『エクフラシス別冊』1（2014）, 161-166頁。

<sup>3</sup> ニュルンベルクの手工業・同職組合については、佐久間弘展『ドイツ手工業・同職組合の研究—14～17世紀ニュルンベルクを中心に—』創文社、1999年。職人層については、佐久間弘展『若者職人の社会と文化—14～17世紀ドイツ—』青木書店、2007年を参照。

<sup>4</sup> ニュルンベルクの貧民たちの経済活動に着目したグレーブナーの興味深い研究がある。Valentin Groebner, Ökonomie ohne Haus. Zum Wirtschaften armer Leute in Nürnberg am Ende des 15. Jahrhunderts, Göttingen 1993.

<sup>5</sup> 中世ニュルンベルクの救貧事業については、古典的な研究として、Willi Rüger, Mittelalterliches

最古の物乞い条令（Bettelordnung）が発布され、喜捨局も設立され、1478年には物乞い条令が改訂された。さらに1522年には喜捨条令（Almosenordnung）も発布され、乞食の取締がより一層強化されると同時に、喜捨制度も形を整えていった<sup>6</sup>。中世後期のニュルンベルクでは、大商人や市民による寄進<sup>7</sup>、施療院や養老院の建立も相次いだ。働く手工業者の姿を印象的に描いた挿絵が有名な12人兄弟館は、富裕な市民によって建立された年輩いた手工業者のための養老院であった<sup>8</sup>。

アルブレヒト・デューラーやハンス・ザックスが活躍した16世紀ニュルンベルクでは、貧しい人々や病人、老人や子供など、生計を立てることが困難な人々はどのような生活を送っていたのだろうか。また、彼らが頼ることのできた援助にはどのようなものがあり、どういった施設を利用することができたのだろうか。ベルナーの報告記は、以上の問いに対して、同時代人の立場から有益な情報を多く提供してくれる。またこの報告記は、南ドイツの多くの都市や地域を調査の対象としており、比較史の視点から見ても、貴重な一次史料である<sup>9</sup>。そのため、近年とくに法制史の分野で研究が進んでいる救貧立法の都市間や領邦、帝国レベルでの影響関係<sup>10</sup>を考察するさいにも、ベルナーの報告記は重要な情報源となる。さらに、ニュルンベルクはすでに1525年の段階で宗教改革<sup>11</sup>を導入しており、長きにわたって論争となっている救貧改革と宗教改革と

---

Almosenwesen: die Almosenordnungen der Reichsstadt Nürnberg (Nürnberger Beiträge zu den Wirtschafts- und Sozialwissenschaften, Heft 31), Nürnberg 1932 がある。ヨーロッパ中世都市における救貧のポリティクスとその展開については、河原温『ヨーロッパの中世② 都市の創造力』岩波書店、2009年、207-221頁を参照。

<sup>6</sup> 一連の喜捨条令の内容については、Eberhard Isenmann, Die deutsche Stadt im Mittelalter 1150-1550. Stadtgestalt, Recht, Verfassung, Stadtrecht, Kirche, Gesellschaft, Wirtschaft, 2., durchgesehene Aufl., Köln/Weimar/Wien 2014, S. 588-593.

<sup>7</sup> 原田晶子「後期中世ニュルンベルクにおける教区教会の社会的機能—内陣中央に置かれた寄進物件からの一考察」『史論』57(2004), 24-43頁；同「中世末期ドイツの都市における聖母マリア賛歌「サルヴェ・レジーナ」寄進の社会的意義—帝国都市ニュルンベルクを例に」『比較都市史研究』31-2(2012), 29-41頁。

<sup>8</sup> 12人兄弟館については、阿部謹也『中世の窓から』朝日選書、1993年；Gerhard Fouquet, Zwölf-Brüder-Häuser und die Vorstellung vom verdienten Ruhestand im Spätmittelalter, in: Sozialgeschichte mittelalterlicher Hospitäler, hrsg. von Neithard Bulst und Karl-Heinz Spieß (Vorträge und Forschungen, 65), Ostfildern 2007, S. 37-76. メンデルおよびランダウアー12人兄弟館の手工業者たちを描いた挿絵は、以下のサイトでデジタル化され一般に公開されている。<http://www.nuernberger-hausbuecher.de/> 【2019年1月8日最終閲覧】

<sup>9</sup> ベルナーの調査対象地は、ニュルンベルク、アウクスブルクの他、ウルム、メミンゲン、イズニー、リンダウ、ザンクト・ガレン、コンスタンツ、チューリヒ、バーゼル、バーデン辺境伯領、ヴェルテンベルク領、シュヴァービッシュ・グミュント、ディンケルスビュール、アンスバッハの南ドイツ、スイスの広範囲に及んでいる。アウクスブルクおよびニュルンベルク以外の諸都市・地域については、別稿で改めて史料紹介をする予定である。

<sup>10</sup> Hannes Ludyga, Obrigkeitliche Armenfürsorge im deutschen Reich vom Beginn der Frühen Neuzeit bis zum Ende des Dreißigjährigen Krieges (1495 - 1648), Berlin 2010.

<sup>11</sup> P. ブリックレ（田中真造、増本浩子訳）『ドイツの宗教改革』教文館、1991年、150-156頁を参照。

の関連性<sup>12</sup>について考察するさいにも、ベルナーの証言は貴重な手がかりを提供してくれるはずである。

## 〔史料翻訳〕

### ニュルンベルク<sup>13</sup>

ニュルンベルクにはどのような人々がいて、彼らはいかに生計を立てているか。〔ニュルンベルクの人々は〕労働や手工業で生計を立てているが、たくさんの子供たちを養う必要がある人たちは、（あらゆる物品の価格が異常に高まっているがゆえに）それだけでは十分に生活することができない。（とりわけニュルンベルクとアウクスブルクでは）貧しい手工業者たちの多くが非正規の仕事で生計を立てなくてはならず、商人たちが儲けを吸い上げてしまうために、彼らは喜捨に頼らざるを得ない状況にある。

また、年齢あるいは病気のために働くことができず、他の人々の援助に頼らざるを得ない人も多い。

健康であるにもかかわらず、働くことを望まず、何の処罰も親切な忠告も与えられることなく、自分の子供や妻を働かせている者もいる。いつの日か彼らが困窮に陥ってしまうのを見たくなければ、彼らには喜捨を与えなくてはならない。

長い間ずっと物乞いばかりしており、他には何もできない者もいるが、〔人々は〕そういう存在とも生涯にわたってなんとか折り合いをつけてやっていくしかない。

ニュルンベルクの貧民は、袖か帽子に、黄銅製の印章（*zeichen*）を付けている。市壁の外に住んでいる貧民も、都市の領民であれば、同様の印章を身に付けており、喜捨に与ることができる。ただし、市内の貧民が黄色の印章を身に付けているのに対し、彼ら〔市外の貧民〕の印章は白色である。

この留め具（*spangen*）〔＝喜捨印章〕を恥じ、身に付けたくない〔路上ではなく、家で喜捨を受け取る〕家住貧民たち（*hausarmen*）に対しては、〔ニュルンベルクの人々は〕いかに接しているか。

この点について、ニュルンベルクでは印刷された〔喜捨〕条令のなかに、家住貧民たちに対していかに対処すべきかを規定した条項が存在する。すなわち、そういった貧民たちには特別な配慮を払い、彼らには内密に喜捨が与えられるべし、と。この条項が慎重に守られることを神様も望んでいるにもかかわらず、私の印象と私が聞き知ったことから判断すれば、〔以上のことが〕厳密には行われていない。家住貧民たちはそれぞれの労働で生計を立てているが、子供が多くい

<sup>12</sup> 例えば、プロニスワフ・グレメク（早坂真理訳）『憐れみと縛り首—ヨーロッパ史のなかの貧民』平凡社、1993年、105頁以下を参照。

<sup>13</sup> Alexander Berners Erkundungen, S. 266-270. 以下の〔〕内は渡邊による補足。

る場合には〔その稼ぎだけでは〕十分ではなく、甚大な不足に耐えなくてはならない。家住貧民たちが嘆いていたのは、もし彼らがこの留め具を身に付けていれば、彼らに仕事を依頼し労働を与えてくれる人々の信頼を失ってしまうということであった。彼らの殿方たちは言ったものだ、おや、彼は乞食になってしまった、私はもはや彼を信用できない、彼は私の持っている物を〔勝手に〕売り払ってしまうに違いない、と。

しかし、そのような理由もなく、単なる自惚れから、あるいは悪い仲間たちに〔留め具を〕売りはらうために、留め具を身に付けてはいない者には、適切に対処し、〔喜捨が〕与えられることはない。

〔喜捨〕条令によれば、留め具を身に付けている者は、路上で物乞いをしてはならない。喜捨の分配のさいには、その人物の立場、病気、子供の多さなどが考慮される。ただし、14 ペニヒ以下、半グルデン [=120 ペニヒ] 以上ではない。大概是 1 ポンド [=30 ペニヒ]、2 ポンド [=60 ペニヒ]、3 ポンド [=90 ペニヒ] が与えられる。

病人は、病気がそれほど長く続いてない場合には、すぐ病院に入れられるのではなく、財産や必要性に応じて、貨幣で援助を受ける。しかし、その病人が薬や食事を必要とした場合には、条令に従って、それらは喜捨から支払われる。さらに後述するように、〔出産のさいには〕特別な条項に従って、貨幣での援助にくわえ、産婆が、寝床、寝具、亜麻布シーツその他とともに、あてがわれる。

ある者が喜捨を必要としていても、市民として 6 年以上ニュルンベルクに居住していない場合には、〔喜捨を受ける〕資格はない。もし自身の労働だけで食べていけない場合には、〔その者は〕再び都市を去るよう忠告が与えられる。

ニュルンベルクは、多くの生業と手工業を抱える都市である。そのため、多くの徒弟と見習い女中が必要とされているが、目下のところ全般的に徒弟が大変不足しており、徒弟を見つけることが難しくなっている。そのため人々は、子供が多くいて〔家の働き手として子供を〕必要としない両親はいないか、あるいは子供を手放すことができる両親はいないか、いつも気にかけている。手工業に徒弟を受け入れることを、自分たちで〔その子供の〕両親と取り決める場合もあれば、その手間を省くため、喜捨委員とその下級役人が、雇い入れの世話を見る場合もある。それにより〔子供の多い両親に対する〕喜捨の負担が減ると同時に、子供たちは、物乞いではなく、労働するよう躰けられる。

共通喜捨 (*gemein almusen*) の分け前に与っている貧民は何人くらいいるのか、という私の問いに対し、喜捨書記は、現在のところ夏には 400 ～ 450 人ほど、冬には 500 人ほどであると答えた。さらに、喜捨管理人 (*almusenpfleger*) は品行方正な女性を一名雇い入れており、彼女は貧しい産婆のために、寝台、寝具、亜麻布シーツその他を自由に使うことができる。〔出産のための〕寝床がない場合には、産褥の間だけではあるが必要最小限の寝床が用意される。産褥後、貸し出されたときと同じように、きれいに清潔にして戻されることとなっている。

喜捨の分け前に与っている者はすべて、貧富の差に関わらず、毎年 4 ポンド [=120 ペニヒ]

の税を支払わなくてはならない。これを怠る者には、喜捨の交付は差し控えられる。ただし、支払いを済ませた者には、友好的に対応し、(人が言うところに従えば)〔喜捨が〕彼の手に戻される。

ニュルンベルクには都市内の二つの場所にそれぞれ孤児院 (*weisenheuser*) がある。一方には 46 人の男の子が、もう一方には 54 人の女の子が住んでいる。両孤児院は、共通喜捨によって運営されており、毎年、会計処理が行われる。さらに両孤児院では、都市内と周辺地で、合計 80 名の子供たちを、孤児院が賃金を支払い雇っている乳母に預けている。

孤児院の少年たちがより早く手工業の教えに触れられるように、あるいはその他なんらかの方法で職にありつけるように、子供たちに読み書きを教えるドイツ語教師 (*deutschen schulmeister*) が雇われている。彼らは孤児院に住むことで、より親身に子供たちの面倒を見ることができる。

墓地の近く、市壁の外にあるペスト・老人用病院の隣に、立派な痲瘋院 (*platerhus*) があり、二階建ての建物に 72 名の患者が収容されている。木材〔痲瘋木〕で治療する者、〔治癒して〕退院する者、入院を待つ者、ひどい損傷により外見が醜くなった患者用の特別な部屋に収容されている者など、すべての者が共通喜捨からの援助で養われている。彼らが言うには、食事や飲み物の不足に苦しむことはなく、毎日 1 マースのビールが与えられている。ただし、葡萄酒が与えられることはない。しかし、病人たち、および回復の見込みのない患者たちは、全体として、病人用の食事を十分には摂ることができず、通常の料理では生き延びることができないと嘆いている。

さらに、優れた医師 (*guten arzt*) が痲瘋患者の世話をしている。彼は患者たちを木材〔痲瘋木〕で治療し、軟膏剤を塗り、それに対して一人毎に 1 グルデン、さらに酒手としておよそ 1/4 グルデンを得ている。この医師は市内に住んでおり、痲瘋院では普段から信頼に足る下男・下女 (人はそう呼んでいる) が〔患者の〕世話を見ている。

ニュルンベルクには、巡礼者や貧者を泊らせるための、二つの安宿 (*Zwo ellend herberg*) が、一つは市内に、もう一つは市外に、存在している。しかし、私が思うに、そして私が知る限りでは、〔ニュルンベルクの〕人々は多くの巡礼者を宿泊させることはなく、まとめて〔さらなる巡礼へと〕送り出し、多くの場合、かろうじて二人ほどが宿泊しているか、あるいはまったく誰も泊まっていないこともある。

午前中にやって来た余所者は、印刷された条令の当該条項とは異なり、(喜捨書記官が私に語ったように) 何も与えられずに送り出される。午後に到着した者だけが安宿に送られる。しかし、もし言うことを聞かず、〔安宿に〕送られて宿泊するのにもかかわらず、物乞いをしようとする者は、適切に処罰され、牢屋に入れられる。

喜捨書記官が私に語ったところによれば、4/1 年間 [= 3 か月間] でかろうじて 30、40、あるいは 50 グルデンほどが献金箱から調達できるという。

ある報告によると、毎年、1600 グルデンほどの支出があるが、それらは貧民の役に立てられるだけではなく、例えば、聖ゼバルト教会の説教師や、あるいは役職を担っている貧しい商人なども、喜捨から給与を得ているという。

またニュルンベルクでは、特別の喜捨を与える市民も時折現れる。ある者は 4/1 グルデンを、別の者は 1 グルデン分のパンを、といった具合に、彼らは各自が与えることができる範囲でそれ

ぞれに喜捨を分配する。

さらに、大きくて立派な施療院 (*ein grossen schönen trewen spital*) があり、そこでは男性と女性が別々に看病されている。収容されているのは、およそ 130 名の女性と男性で、通例では年若い収入のない、たゞまだ寝たきりではない人々であり、彼らは施療院条令に従い生涯にわたって援助を受けている。施療院への入居を望む者は、参事会および市長から認可をもらう必要がある。(人々が言うには) この施療院にも医師がおり、日々患者を診て回る。看護に関して言えば、100 名以上の女性が嫌な臭いが充満する一つの空間に収容されるなど、我々の〔シュトラースブルクにある〕施療院にある病室よりも、大部分において、はるかに酷い状況にある。

またニュルンベルクには、市外の痲瘋院の近くに、疫病・ペストの時期に開放される特別の施療院がある。〔それ以外の時期には〕単独で生計を立てることのできない下男・下女などの使用人が利用する。あるいは、市内の貧しい市民が、その下男・下女たちによる、すべての必要な世話を受けることができ、〔その費用は〕都市が負担している。

さらに、喜捨を分配するために 4 名の下男が雇われており、2 人一組で仕事をする。彼らはそれぞれ 14 日毎に都市中のすべての貧民を訪ねる。この 4 名の下男が余所者の乞食の面倒を見ることはない。

余所者を追放するため、特別に 2 名の下男が雇われており、彼らは、言うことを聞かない者を見つけた場合に、適切な方法で、〔その者を〕乞食の牢獄に連行する。

どんぶり喜捨 (*schussel*) とも呼ばれている、富者による喜捨 (*reichen almusen*) について。

富者による喜捨は、初めの頃はそれほど数も多くなかったが、〔富者の〕死去のさいや遺言のなかで遺贈されることが多くなり、徐々にその件数が増えている。

富者の喜捨の中身は、我々〔シュトラースブルク〕の喜捨のパンと同じほどの大きさの 2 切れのパンと 2.5 ポンドの牛肉となっている。これは、例年だと、ほぼ 6 クロイツァーの価値がある。

誰に与えるか？ 一般喜捨を受けることを恥じ、留め具〔喜捨印章〕を公然と身に付けることを望まない、しかしどうしても自身で生計を立てていくことができない者に与えられる。喜捨書記によると、その数は 500 名ほどにのぼる。

富者の喜捨のため、専用の肉屋が毎週 13 ツェントナーの肉を調達することになっており、時折、肉屋が求めた場合には、富者の喜捨から 100、200、300、あるいは 400 グルデンが前払いで与えられ、それにより牡牛が購入される。

毎週、富者の喜捨のために 9 マース籠のライ麦を焼かなくてはならず、そのためのパン焼き人も存在するが、彼は別の人々のためにもパンを焼いている。

毎日曜日、聖ゼバルト教会堂わきの墓地に、特別な小屋が設けられ、説教とミサが行われている間、富者の喜捨が分配される。

富者の喜捨だけで十分でない者は、共通喜捨を求め、それが認められた場合には、その者は富者の喜捨〔を得る権利〕を失う。

共通喜捨を得ている者には、富者の喜捨は与えられない。また逆に、富者の喜捨を得ている者

には、貧者のための〔共通〕喜捨は与えられない。

自身の労働により生計を立て、しかしそれでは足りないという者が、富者の喜捨で当座をしのご。そのために留め具を身に付ける必要はない。私が実際に見たのは、夫がすでに 4/1 年〔3 か月〕間以上も施療院に入っている金細工師の妻であった。彼女は、鍵をぶらさげるための真鍮製のリングと鎖を作成して商人に売りさばくなどして、7 人の子供を養っていたが、富者の喜捨の他に何も援助を受けていなかった。

〔富者の喜捨を受ける〕人々は、厚みのあるペニヒ貨のような、ニュルンベルクの紋章が描かれた小さなコインを持っている。〔富者の〕喜捨を受け取るさい、彼らはそのコインを持参するが、公然と身に付けておく必要はない。

富者の喜捨を受けることが認められている者には、たとえそれが一人であっても、子供の多い二人夫婦であっても、2 切れのパンと 2.5 ポンドの牛肉が〔同じ分だけ〕与えられる。

それほど甚大な困窮に苦しんではおらず、しかし、自身の労働だけでは十分に生計を立てていくことが難しい場合には、14 日に一度だけ、2 切れのパンと 2.5 ポンドの牛肉が与えられる。

富者の喜捨が分配されるさいには、アルファベット順に登録された名前が呼ばれることとなっており、いつも A から始める：アダム、アブラハム、アグネス、アフラなどなど。